

2020年6月28日 礼拝説教要旨
 詩編講解説教20「答えてくださる神」
 詩編20：2～10、ヨハネ16：33

第20編は「王の詩編」と呼ばれています。また「勝利」（6、7、10節）、「旗」（6節）、「戦車」「馬」（8節）という言葉は戦いをイメージさせますので、これは王が戦いに出る際に歌われたものとされています。確かにこの王がダビデと考えるならば、ダビデも戦いが多かったわけで、その戦いの度に勝利を願って神さまに祈ったということは十分考えられることでしょう。しかしそれは単に戦いに勝たせてくださいという祈りなのでしょうか。それなら世にある必勝祈願とどこが違うのでしょうか。ともするとわたしたちの祈りは自分に都合のよい祈りになってしまうことがあります。ここはそういう祈りでしょうか。

この詩編について幾つかの注解書が記しておりますのは、イギリスの国歌「God save the queen」はこの詩編から作られたということです。教会と国家が密接な関係にある国では、このような国歌が歌われるのでしょうか。でも気をつけなければならないのは、かつて「王権神授説」といって王の権威は神さまが与えたものという思想がありました。イギリスもフランスもかつてそういう時代がありました。そうすると王は絶対的な権威を持つようになります。自分の考えイコール神さまの御心だと都合よく解釈することになります。ここでの大きな間違いは神さまを信じているようで、実はそこに神さまはおらず、自分が神になっていることです。それは自分の思い通りにしたいだけのことであります。そういう神なき王が出現するのです。

それは政治の話で、わたしたちには関係ないということではありません。わたしたちも「神なき王」になります。家庭において、職場において、学校において、そこには小さな権威があります。父親の権威、母親の権威、先生の権威、上司の権威。それを振りかざして家族を支配する。仲間を支配する。そういうことが日常的に起こります。今日のパワハラの問題、DV（ドメスティックバイオレンス）の問題、いじめの問題。それはすべて「神なき王」の問題です。自分が神になり、自分の思い通りに人を支配しようとする。特に上に立つ権威のある人は気をつけなければなりません。もちろん牧師も長老も例外ではありません。教会もまたそういう権威の誘惑から自由ではないのです。

では人が権威を振りかざす時というのはどういう時でしょうか。8節（読む）「戦車」「馬」というのは戦いに欠かせない道具です。優れた道具、戦車、馬を持っていることが戦いを有利に運び、またそれが王の権威の象徴でもあります。今日で言えば、さしずめ戦闘機やミサイルということになるのでしょうか。そういう道具を持つことで王は自分が神になったと思う。それはわたしたちも同じです。人より優れた何かを持っている。秀でた才能がある。そういう才能は神さまがお与えになられたものですが、しかしそれを忘れて、自分が優れていると考え、人を見下すことがあります。また学歴や職歴、社会的な地位など、そういうものを持つことで勘違いする人は大変多いのです。戦車を誇る、馬を誇る時に、わたしたちは神さまの存在を忘れ、全部自分の手柄にして自分が神になったと思うのです。

しかしこの詩人はそういうわたしたちの心の動きに抵抗するように「我らは、我らの神、主の御名を唱える」と言います。それはそういう誘惑に負けて神なき王になるのではなく、それに抵抗してどこまでも神さまを中心に据える、そういう戦いをこの詩人はしている。この戦いは

今日のわたしたちに適用するなら、極めて信仰の戦いであり、自分を神にするのではなく神さまを神さまとする戦いなのです。自分に都合よく神さまを利用するのではなく、神さまの御心が行われることを求め、その御心に委ねる信頼をわたしにくださいという戦いであり、祈りがここにあるのです。

ではその信頼はどのように養われるのでしょうか。2節「苦難の日に主があなたに答え」とあります。「答える」(ヤアヌハー)という言葉が2節と最後の10節に使われています。詩編にはこういう最初と最後に同じ言葉を使う手法がよく見られますが、これをインクルージオ(囲い込み構造)と呼びます。この「答える」という言葉が一つの鍵になっています。神さまに対して呼び求めたら、それに答えてくださる。わたしたちの神さまはそういう神さまなのです。そこに信頼関係は生まれます。人間関係もそうでしょう。呼んでも答えない、一方通行だとそこには不信感しか生まれません。求めに対して誠実に答える。対応してくれる。そこに信頼関係が作られます。神さまはわたしたちの求めにきちんと答えてくださるお方なのです。

では神さまはどのような仕方でわたしたちに答えてくださったのか。その答えこそイエス・キリストです。キリストが世に遣わされ、十字架の死に至るまでわたしたちに仕えてくださった。神さまはわたしたちの求めに誠実に答えてくださったのです。それによってわたしたちは罪から救われ、神さまと深い信頼で結ばれました。そこに最善のことがあります。そのように答えてくださる神さまだからこそ、わたしたちは信頼して祈るのです。それは自分に都合のいいことを求める祈りではありません。最善のことをしてくださる神さまにすべてをお任せして、御心をなしてくださいという祈りがそこに与えられます。

伝統的に教会はこの「王」をキリストと解釈してきました。7節「主は油注がれた方に勝利を授け」ここに「油注がれた方」(メシア)という言葉があります。イエス・キリストはメシア、王としてこの世に来られ、そして十字架とよみがえりの御業によってサタンの力に勝利されました。ですからこの20編もキリストによって成就した御言葉であり、キリストの救いを待たなければなりません。わたしたちはすでにこのキリストの勝利を知っているのです。それを知ってここを読むことができます。この勝利の王、キリストに結ばれる時に、わたしたちもこの勝利に生きることができる。どんなにこの世が戦車を誇り、馬を誇ろうと、わたしたちは神さまを信じて歩むことができます。

サタンは様々な仕方でわたしたちを神さまから離れさせていきます。神なき王にさせるのです。そこにサタンの目的があります。今のコロナ禍もそうでしょう。集まることが制限され教会の行事も中止が決まっていきます。これは伝道の妨害です。そこで人々の愛は冷え、孤立を深めていきます。でも神さまはこのような苦難の日にこそ「わたしを呼べ、わたしは答えよう」と約束されます。すべてに勝利された王キリストが与えられた。そこに答えがあります。

天の父よ。簡単に神なき王になります。自分を中心に身勝手振る舞うのです。それがあなたを悲しませ、隣人を悲しませてきました。けれどもこの誘惑に打ち勝つ真の王としてキリストを与えてくださいました。どうぞこの勝利のキリストによってあなたの御心をこそ最善のことと信じ委ねる者としてください。主の御名によって祈ります。アーメン。